
黒のエニグマ

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒のエニグマ

【Zコード】

Z2722L

【作者名】

雨月

【あらすじ】

静かにそれははじまっていたのだろうか、いや、正確には男が部屋を借りてからだろう。男は静かにこの世を去了た……ならばどうほどよかつただろうか。

プロローグ

俺はある日、会社から転勤を命じられ、部屋を借りた。行かなければ首を切ると暗に言われたからだ。辞めてしまおうかとも思ったが、これも人生の経験だと転勤することにした。

引っ越しのために都内で家賃が一万円という破格の値段のアパートの一室を借りた。なんでこんなに家賃が安いのか疑問に思つて聞いてみたところどうやら出るらしい。

「おびえて出て行つた人は何ともないんですけど居続けた人は…」
その先、答えなかつた。

「まあ、いいですよ。俺、そんなの信じていませんから

「そうですか。では何がありましたら連絡ください」

俺がここにこしている不動屋さんを見おくつたわけだが、これで最後だつた。

引っ越してきて数日、俺は違和感なくそこで生活した。そして、ちょうど一週間後家の近くで占いをしていたばあさんに呼び止められた。

「なんだよ、俺は占いなんて興味ないぞ」

「……お前さん、女にとり殺される。心しておくがいい。しかも、素直にあちらへはいけないようじやな、ヒヒヒヒ」

「余計な御世話だ、くそばばあつ」

いやな笑い方をしてそのまま消えたばあさん。ま、俺がその程度でビビる人間だつたら大間違いだ。

「小さなころは信じていたんだけどな、幽霊とか

今年で俺も二十路だ。まだ、彼女なんて出来たことないからどうだし、幽霊を見つけるより先に女を見つけなくては何ともいえん。

おかえりと言つてくれる彼女もいないさみしい俺はため息をひと

つはいて部屋へと入る。

「うーん、そういうえば小学生のいるせ女の子とこいつも一緒にいたんだけどな」「

誰に「いうでもなく、つぶやいた。しかし、やつぱり答えを返してくれる人なんだからではない。

疲れていたのでさつさと薄っぺらい布団を出して俺は蒸し暑いことに文句を言いつつも静かに眠った。

急に寒くなつて田を覚ますとだれかが部屋にこるよつた気がした。立ち上がり、周りを見ると台所のほうに包丁を持った女がこりひて背を向けて立つている。

「お前、そんなところをしてくるんだ」

「…………」

女はこりひて顔を向ける。

青白く、正規の感じられない顔だった。髪は長く、整つた顔立ちでもてやつだ。

「…………」

身体が急に動かなくなり、そのまま倒れてしまつた。女の足がゆっくりこりひて歩を進める。視界の上であらはりつて包丁は鈍く光つていた。

倒れた時に頭を打つたから身体が動かなくなつたと思つた俺はなんとか身体を動かそうと努力するが、無駄だった。しかし、なぜか口は動いている。

「頼む、俺を殺すんなら一発やらせてくれ。俺、童貞なんだつ。や

つたら好きなだけ包丁突き立てていいから」

「……」

女の歩が止まつた。

これは脈ありと思つたのだが、考えが甘かつたのかもしね。次の瞬間に女は馬乗りになつて俺の胸へと包丁を振りおろし、突き立てた。

「がつ」

悲鳴を上げる事もなく、俺は徐々に何かに身体をむしばまれる感覚を覚え、気を失つた。いや、命を失つたと言つたほうが正しいのかもしね。

次の日、激安アパートといわれていた一室で殺人事件が起つた。近隣住人はなれたものでまた被害者が出たのかとため息をつき、警察はやつきになつて犯人を捜した。だが、見つかることはなくこの事件はお蔵入りとなつてしまつた。

しかし、この殺人事件を機に四十年後アパートが取り壊されるまで変な音を聞いた、女がいたなどという話は一切聞かなくなつた。それまで激安アパートといわれていたが、改装し、新しくなつたおかげで新たな住居者も見つかつたのである。

プロローグ（後書き）

これまで書いてきたモノとはちょっと違います。かなり不定期です。
後戻りができないように投降した次第ですがはたして……吉と出
るか凶と出るか……。

気が付いたら赤ん坊になっていたという経験を俺は生まれて初めてした。なぜ、赤ん坊になっていたのかはさっぱりわからないがものすごくおなかがすいていた。一生懸命母親から哺乳瓶を奪い取り、ゴムの乳首に吸いついた。手がうまく動いてくれないことにいらつきながらもなんとか食事を終える。

「おいちかつたでしゅかあ」

若い女性が俺の顔を覗き込みながらそういう。俺はうなずきたかつたが身体が動かない。肯定の仕草をするために手足をばたばたさせてみた。ついでに、笑つて見せる。

「おお、喜んでるなあ」

人のよさそうなおじさんが俺を見て笑っていた。幸せいっぱいの家族、きっとはたから見たらそう思えるだろう。

「照義は夜泣きもしないからとつても楽だわ。お向かいの海ちゃんは夜泣きが大変だつて」

「照義は大人だな」

照義とは俺の名前なのだろう……はて、俺はそんな名前だっただろうか。ともかく、今は照義（仮名）として扱ってもらおう。

照義という名前は置いておくとして、三十にもなつたおっさんが夜泣きなどするわけがないだろう。でも、赤ん坊なんだからちゃんと理不尽に泣かないとおかしいかもしねない。

「あ～んつ」

「て、照義つ、どうしたのつ」

「お漏らしでもしたのか」

おっさん……たぶん、俺の父親なのだろうな。おっさんに抱きかかえられるがへたくそだつた。俺は一生懸命おっさんから離れようとする。

「ふえふあふそ」

くや、「うまくしゃべる」ともできません。

「もう、そんな抱き方じゃ駄目よ」

「え、そ、そうなのか」

おっさん的手から女性のほうへと移る。ふむ、やはりおっさんはこの女性に育児をさせっぱなしのようだな。確かに、仕事も大変だがきちんと家庭のほうも見てやらないといけないぞ。

ぴんぽーん

「あ、誰か来たわ。あなた、出でよ」

「わかった」

おっさんは返事をしながら玄関のほうへと歩いて行つた。

「優奈あ、向井さんが御茶しよつてさ」

「あ、そうなの。あがつてもらつて……照義、ここで静かにしてね」

小さなベッドの上に俺は置かれ、おふくろは御茶の用意を始めた。しばらくすると女性と男性が入ってきて、男のほうは赤ん坊を抱いていた。

「海ちゃん、照義君と静かにしてなさいね」

言葉がわかるのかどうかは知らないが俺の隣に赤ん坊がもう一人、やってきた。相手は俺のことを見ると驚いたように目を丸くした。一生懸命両手を動かして何かを訴えているようだ。立ち上がりつつと頑張っているが、まだ無理なのがベッドの中である。

「……」

こんなくそ狭い中に一人も放り込むとは……これは監獄なのだろうかとため息をついていると隣の赤ん坊は俺の手を掴んでいて、静かに眠つた。

「どうせする」ともなかつた俺は同じようにしてそのまま寝る」と

に
し
た
。

第一話

五歳児、まあ、大体幼稚園か保育園に通っていることだろう。そして、中にはふざけて先生に抱きつくガキもいる。

「先生のおっぱいやわらかい」

「もううつ、ダメでしょ」

ふうう、俺もあんな風に飛びついて豊満な胸に顔をうずめたいのだが三十のおっさんがそんな赤ちゃんプレイに興じるわけにもいかない。というよりも、周りが本当にガキばかりで困ったものだ。それに、女の先生に抱きついている暇はない。俺は海の面倒を見なくてはいけないのだ。まあ、今日は熱を出して休んでいるので俺も暇なわけなのだ。

「あれ、照義君はみんなと遊ばないのかな」

「センセ、俺はガキじやないんだからガキとは遊べねえよ」
スケベなガキの相手を終えて、俺のところにやってくる。もちろん、身長が全然違うので見上げなくてはならない。ま、相手も先生だからわざわざ俺の身長に合つよう腰をかけてくれるのだから首が疲れなくていいんだけど。ああ、それと今更思い知らされたのがガキの体は本当にアンバランスだな。一年ぐらい前まで本当に気を抜くと後ろに倒れそうになるんだから、頭が重いわ。

「ふふ、そうだったわね。でも、普段はいつも海ちゃんと一緒にいるでしょ」

「そりやあ、あいつを見てないと何をしだすかわからないからだ。この前なんか車が来ているのに車道に飛び出したんだぜ。あの時は本当に死ぬかと思った」

本当、ガキは何を考えているのかわからんな。ぎりぎりで助かったのでほっとしたが、運転手に怒られちました。

「じゃあ、今日は海ちゃんもいないし先生と一緒に遊ぼうか」「いいよ。センセも普段からガキの相手で疲れてるだろ。それに、俺みたいなやつと話すよりあっちのガキ達と遊んで来れば俺はセンセと別れて一人、ジャングルジムへと旅立つた。

ガキになつたら何をしたいか。まあ、幼稚園児じゃ そうそううまく教科書なんて手に入らないし、どうせ小学生になつたらいやでも勉強をしなくてはいけないのである。小セーころ、ガキ大将にいじめられた記憶がある俺は己の身体を強化することにしたのだ。

「ふんつ、ふんつ、ふんつ……」

家に帰つたらカルシウムを出来るだけとむよつにしており、普段の生活ではやはり、長袖は必須である。周りには肌が焼けるのが嫌だと言つていいのだが幼稚園児にしては腕が太いといわれるのが嫌で隠しているのである。

「なあーなあー

「ふんつ…………ん、なんだよ」

「なんてるちゃんそんなどしてるのあー」

下には鼻水の垂れたガキが立つていて。ガキとまともにしゃべることができない俺は話をそらすことにする。

「あつちで先生と遊んできただうだ」

「ええーだつて、里奈先生がてるよしくんと遊んできあげてつていつたんだもん」

かづつ、あの姉ちゃん、本当おせつかいだな。いや、大体おせつかいじゃないとこここの先生になるのは難しいかも知れないな。

「わかった。だけど、本当はお前もセンセと遊びたいんだろ」「うん」

素直でよいじこつ。

「俺はほかのやつと遊ぶからお前はヤンセのところに行け」

「わかつたつ」

嬉しそうに走つていぐ後ろ姿を眺める。俺にも子供ができるたらあんな馬鹿そうに走つて行くんだろうな。

「さて、嘘はつけないから適当に相手を見つけて遊ぶとするか」

俺が行くべきところは職員室だつたりする。うん、先生と話でもするとしよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2722/>

黒のエニグマ

2010年10月11日01時49分発行